

Robert Mauzi :

*L'idée du bonheur
au XVIII^e siècle.*

高橋安光

生半可な皮肉と受けとられても致し方はないが、献辞という代物は洋の東西を問わずいささか照れくさいものにちがいないはずだ。本書をあけたとたんに眼に入るのは著者が20名以上にのぼる恩師や先輩たちに捧げている感謝の言葉である。これを額面どおり解するならば、本書は多くの学者たちの示唆と協力によってできあがった、言ってみれば、現代フランスにおける十八世紀研究の一大成果とみなしうるような作品なのだ。しかし著者はあくまで一人であり、したがって叙述はもちろん認識および方法も個人の責任とみられなければなるまい。ただなんらかの意味合いから十八世紀研究者たちの責任の連帯を感じさせる献辞であり、事実と相違するとすれば随分と迷惑な代物になりかねないのだ。おそらくこれは私の邪推にほかならないようである。なぜならば日本フランス文学会のお偉方がモージ氏をわざわざ招待して現在各地で講演をお願いしているほどであるからだ。

著者が本書を献じているルネ・バンタールはいまをときめくソルボンヌの大御所であり、17世紀の自由思想リベラチナージュに関する該博な研究をもって有名であるが、モージも師にならって博引傍証を骨頂とする研究者タイプである。それは良い意味でも悪い意味でもソルボンヌ実証主義派の典型と言えるであろう。豊富な資料を見せつけられて絶望感をいだく外国人研究者の存在は事実であり、可憐でさえある。もっとも救いがたいのは本場の猿真似をして

得意然と振舞っている徒輩であろう。だからといって遠く本場のお歴々にまったく罪がないとは言えないのではなからうか。本書はそうした現代フランスの17・8世紀研究の在り方について何かと考えさせてくれるに恰好な作品であると言えよう。

序文に示された意図からすれば、モージは、従来の思想史が思想の論理そのものの発展の跡づけだけに終始して人間不在のそれとなっている点にまず不満を表明している。つまり具体的に言えばカッシーラー等の思想史研究の方法にたいする批判なのだ。この指摘はオリジナルではないが正当性を有するものであり、これからも繰り返されるに値する発言である。そこでモージは道徳や哲学や宗教といった領域からの資料にかぎらず文学上の作品を縦横に駆使しつつ思想史の肉づけをおこなうという方法を取り入れているのだ。この点はたしかに今までの思想史研究には見られなかった前進と言えるであろう。だがこうした試みが今日までなされなかったわけではけっしてないのだ。フロイドの流れを汲む思想史研究者たちの存在は言うまでもないが、文学や芸術上の作品を手際良く援用しつつ社会思想史の裏づけにつとめている研究家の存在はとりわけ戦後のアメリカなどの特色でさえあるだろう。ただこれほど丹念にそして徹底的に文学作品に密着した思想史の出現が見られなかったまでである。

本書のテーマが幸福の観念ときめられているだけに論究の中心はいきおい愛とか快樂といった概念の分析となってくる。そこで彼はブレヴォ師の『マノン・レスコー』やレチフ・ド・ラ・ブルトヌの『サラ』やルソーの『新エロイズ』やラクロの『危険な関係』におよぶ当時のさまざまな文学作品に現われた感情や悦楽や美徳の内容を追究するのである。しかもそれらの分析は、著者がかなりのセンスの持主であることを示しているのだ。

「公平無私な愛という神話は唯一の愛というそれと同じように脆いものである。愛と自己愛は同一の水源に流れこみ、しばしば交じりあうものだ。ラクロは『危険な関係』の中で、快樂は虚栄心の助けがこなければそれ自体で調和関係をつくりあげることとはできない、と説いている。虚栄心の微妙な喜びをとまなう以前の愛はごく平凡な快樂の交換にすぎないのである。」(p. 465)

ここでモージのために弁じておかねばならないのは、えてしてこうした文学的手法を用いる場合、われわれの多くが陥りやすい罠つまり人間臭にこだわりすぎて本論の追究から遠ざかってしまうという危険、これを彼はたえず回避することにつとめているということである。彼はつねに一貫して「幸福という観念」の追究から踏みはずすまいと心がけているのだ。たとえばヴォルテールとシャトレ公爵夫人の友情というか友愛というかあるいは恋愛というか情事というか基だ表現しにくい心事をとりあげる場合も、好奇心のおもむくにまかせて詮索することは手控え、「幸福」という問題点にしばってまとめあげているのである。

「幸福とは同時に二つの感情を味わうことから成り立っている。熱烈に愛したヴォルテールといえどもシャトレ夫人の幸福には満足をあたえなかったのだ。彼女にはすくなくともリシュリュウ公爵の友情が必要だったのである。友情がそれ自体の要求で満足しうる自立感情でない想定するにせよ、それは愛情にたいして随伴的補足的地位を占めるのである。友人とは自分が愛している人間について語りかけうる貴重な存在なのである。」(p. 472)

このように本書には叙述の方法の一貫性は十分に認められる。その点ではいかなる頁か

ら読み出しても全体の論旨をたやすくつかみうるような安心感をあたえられる作品である。だが少しく意地の悪い見方をすれば、辞典をひもとくような味気無さに通じる面もなくはあるまい。おそらく読者はこの二つの印象を同時にくりかえしだきつづけるであろう。いったいこれは単に叙述上の問題にすぎないのであるか。エッセーをよむ場合ならいざ知らず、研究書においてこうした印象をあたえられることは単なる叙述以上の要因を予想させずにはおかない。そこに著者の認識および方法の問題がとりあげられてくるのである。

モーゼは本論を展開するにあたって一つの重要な前提の上に立っているのだ。彼の場合それは前提であるとともに結論ともなっているのである。その前提とは、幸福論をめぐる18世紀フランスの道徳思想はすでに17世紀において充分に準備されていたものであり、ダランベールやコンドルセが人智全般に適用しようと信じた「進歩」のイメージはそこに見出されえないというものである。つまりモーゼは十八世紀フランスの道徳観念にはほとんど変革も進歩も認めえないと断言しているのである。したがって彼はいたる所で17世紀の道徳論の紹介をおこなっているのだ。はたしてそうであろうか。かりにそうであるとすれば、その理由はどこに求められねばならないのか。それにたいする答は最後までえられぬままに終わっている。この人はこう言った、あの人はああ述べた、との連続では問題の本質的追究はありえないはずである。たしかに彼がある作品から引用する時、それは問題に関心をもち読者の眼にはなるほどと感心する箇所をえらんでいるのだ。なぜならばそこには作者が生きた社会や個人のうちの矛盾が摘発されているからである。その多くは逆説というレッテルをはられて紹介されているのだ。だが17世紀的前提から見下ろしているモーゼはモラリストたちのすぐれた逆説を

産み出した歴史的社会的矛盾の解明に乗り出そうとはしないのだ。尖鋭な逆説の引用と解説だけでは時代の生きた思想の本質的把握を望むことはできない。繰り返して言うがカッシーラー等が描きえなかった人間世界は大はばにとりあげられているが、それにたいする認識の面ではむしろ後退しているといった感じさえ受けるのである。したがって「18世紀における幸福についてのさまざまな見解はつねに曖昧なものに基づいている」という定言は彼自身の認識の在り方とつよく関連しているのだ。たとえ18世紀の幸福論があいまいだとしても、それなりの根拠が示されるならば、こうした投げやりな定言となって現われるはずはないのだ。そこには現象のあいまいさにこと寄せて認識のそれを正当化しようとする姿勢がうかがえるのである。それはきわめて勤勉な学識者にしばしば見られる社会的意識の欠落であり、矛盾や逆説の論理にたいする不感性である。こうした著者がつぎのような結論に到達せざるをえなかったことはむしろ当然であろう。

「18世紀の人びとに幸福という言葉の意味をせばめたと非難することはできないであろう。どうしても彼らに文句をつけなければならぬとすれば、彼らが人間や社会や世界のあらゆる根源をより確実に汲みつくすためにそこに幾多の矛盾を置いたということであろう。」 (p. 657)

着眼はけっして的外を外ずれているわけではないのだ。だが幸福という概念の中に置かれた矛盾こそ18世紀人のもっともすぐれた功績であり、それを解決するすべを見出すことに苦慮していたところに彼らの限界があった、と言うべきであろうに、モーゼはまったく逆の結論に達しているのだ。彼の観念的な認識と方法からすれば必然的にこうならざるをえなかったのである。

こう言いきってしまえば本書のもつ学問的価値はかなり低いものになってしまう。だがそれは私たちの目差す思想史の在り方から評価するかぎりでの話である。また本書は私たちの立場からしても有意義な価値をもつものでもある。なぜならばモーゼが 18 世紀思想界の欠陥として指摘する箇所は、とりもなおさず私たちが長所とみなすに適切な資料となりうるからである。しかもそれは敬服に値する努力をもって蒐集された資料である。二番煎じで結構学者面のできる世界に住む人種にとってはなかなかありがたい書であろう。また謙虚な方法と鋭利な認識をもつ研究者にとっては逆説的以上の意義をもちうる作品となるであろう。すぐれた着眼と広い視野および豊かな感受性があるだけに、その弁証法的論理の欠如が齒がゆいほどに惜しまれるだけである。

だが終りに目立たぬよう小声でつけ加えておこう、舌たらずのイデオロギーを振りまわして一向に恥じないお粗末な私などはこういう研究書に接して少なからずコンプレクスをいただくべきであろうか、と。

Robert Mauzi: *L'idée du bonheur au XVIII^e siècle*, Armand Colin, 1965.